

## アダム・スミスの穀物尺度

中 川 栄 治\*

### 1. 序

アダム・スミスは真の価値尺度を労働とするのであるが、価値尺度に関するスミスの議論における金銀・貨幣および穀物ということも、それを巡って様々な理解が提示されてきた諸論題の一つである。筆者は、中川（2016）中で、真の価値尺度を労働とするスミスの議論において金銀・貨幣および穀物はどのように取り扱われていたのかという視点から、初版あるいは初出が19世紀末から1970年代末の欧米文献をみる試みをなした。そして、例えば、それらの諸研究には、以下のような諸類型が見出されうることを示した<sup>1)</sup>。

【類型1】事実上、いわゆる「価値の内在的尺度」、「価値の外在的尺度」といった視点に立ちつつスミスの議論における金銀・貨幣および穀物をみるもの。

【類型2】スミスは真の尺度を金銀・貨幣あるいはさらに穀物ではなく労働としたとみる形で、金銀・貨幣あるいはさらに穀物に言及するもの。

【類型3】事実上、真の尺度を「労働」としたうえでスミスの議論における金銀・貨幣および穀物を論じようとするもの。

(3-1) 事実上、尺度に関するスミスの議論における金銀・貨幣および穀物を、真の尺度としての「労働」から独立的な、その意味で労働と同格な尺度と捉えつつ議論を展開しているといえるもの。

(3-2) 事実上、尺度に関するスミスの議論における金銀・貨幣および穀物を、真の尺度としての「労働」との関連で捉えられるべき尺度とみつつ議論を展開しているもの。

(3-3) 事実上、尺度に関するスミスの議論における金銀・貨幣および穀物を、賃金率、賃金単位の大きさを表示するための手段として論じられているとみつつ、議論を展開しているもの。  
【類型4】事実上、真の尺度を「労働」としたうえでスミスの議論における「穀物」を論じようとするもの。

(4-1) 事実上、尺度に関するスミスの議論における穀物を、真の尺度としての「労働」から独立的な、その意味で労働と同格な尺度と捉えつつ議論を展開しているといえるもの。

(4-2) 事実上、尺度に関するスミスの議論における穀物を、真の尺度としての「労働」との関連で捉えられるべき尺度とみつつ議論を展開しているといえるもの。

【類型5】事実上、スミスは、商品の量を穀物で表示すれば、すなわち商品の量を穀物の量に換算して捉えるという方法をとれば、労働者の生存費水準に変動がある時にも、当該商品量とそれの持つ労働支配力とを経時的に安定的な関係のもとに把握でき、また、貨幣的変動から生じた貨幣の商品購買力に変動がある時にも、当該商品量とそれの持つ他の商品に対する購買力とを経時的に安定的な関係のもとに把握できる考えた、とみているといえるもの。

【類型6】スミスは事物の生産における生産性の変化の指標を論じる脈絡中で「労働」、さらに「穀物」を取り上げた、とみるもの。

---

\* 広島経済大学名誉教授

【類型7】 スミスは、技術変化の存否およびその程度を反映した形で商品の価値（相対価格）の大きさを表示し異時点間の比較を可能にする標準という脈絡中で、「支配労働」という労働標準の代用物として穀物標準を論じた、とみるもの。

また、筆者は、例えば、中川（2020）中で、『国富論』（Smith（1976; 1776）, 以下、WN と略記）第1篇第4章での商業の用具としての金銀・貨幣に関するスミスの議論に触れ、中川（2022）、中川（2023b）中で、スミスが価値尺度を論じる第1篇第5章での金銀・貨幣および穀物に関する議論に触れた。本稿は、上述の検討結果を踏まえつつ、価値尺度に関するスミスの議論における金銀・貨幣および穀物、とりわけ、中川（2023b）の最後で触れた二問題のうちの一方、穀物の実質価格の長期的安定性の問題を含め、価値尺度としての穀物に焦点を当て、スミスの議論を検討しようとするものである。

## 2. 同一時点と異時点間、および、実際の尺度と理論的尺度

筆者のみるところでは、『国富論』第1篇第5章の第1段落から第6段落は同一の時と場所に関わり、第7段落から第22段落は離れた時と場所に関わる。そして、支配される生きた労働は、そのいずれでも真の価値尺度となっている<sup>2)</sup>。また、そこでは事実上、尺度は、思索（speculation）の問題でのものと実際の売買、取引の問題でのものが考えられており、理論上の尺度と実際の売買、取引での尺度とが考えられているといえる<sup>3)</sup>。

その点からいえば、支配労働は、時と場所のいかんを問わず、理論上（思索上）の尺度ということになる。それに対し、大多数の人々にとっては、労働の量は、抽象的な観念であって自然で明白なものではないため、商品価値を、

当該商品と交換される特定商品の量によって測るほうが分かりやすく、さらに、貨幣が商業の共通の用具になると、商品の交換は、貨幣を媒介として行われるようになり、そこでは、商品価値を、当該商品と交換される貨幣の量によって測るほうが、より自然で明白なこととなる（WN I.v.5-6／大河内訳 I, 55-56頁）。この意味で、貨幣は、少なくとも同一の時と場所に関しては、労働よりも簡明な尺度として実際の売買、取引での尺度ということになる。

また、貨幣は、同一の時と場所では、実際の尺度であるとともに理論上の尺度でもありうる。すなわち、同一の時と場所では、一定額の貨幣は一定量の労働支配力を意味し、商品の真実価格と名目価格は正確に比例するからである（WN I.v.19／大河内訳 I, 64頁）。

他方、異なる時と場所に関しては、事情は異なる。

相対的に短い異時点間（例えば年々、長くとも半世紀あるいは1世紀）では、貨幣（銀）の労働支配力の相対的安定性の故に、貨幣は、（上と比べて精度は劣るとしても）実際の尺度であるとともに理論上の尺度でもありうる。それに対し長い異時点間（例えば世紀から世紀）では、貨幣は、前述の条件に欠けることから、理論上の尺度たりえない。ただし、異場所間に関しては、実際の尺度であり続ける。離れた場所の場合は、商品の真実価格と名目価格との間には正確な比例関係はないが、商人たちの関心事は、財貨を仕入れる際の銀の量とその財貨の販売で得られる銀の量との差である。価格に関わる日常的業務を規制するものは、財貨の真実価格というよりも名目価格なのである（WN I.v.16-21／大河内訳 I, 62-65頁）<sup>4)</sup>。

以上の貨幣に対し、価値尺度に関するスミスの議論において尺度としての穀物が現れるのは、事実上、長い異時点間の理論上の尺度の脈絡においてである（WN I.v.15-17, 22／大河内訳 I,

61-63, 65-66頁)。

### 3. 価値の尺度と富の尺度および穀物

筆者は、スミスの議論における理論上の尺度あるいは実際の尺度としての労働、貨幣、穀物の適用領域を上のようなものと捉えるのであるが、スミスのその議論はまた、本稿に先立つ諸稿中でも言及したように、例えばリカードウやマルサスが問題とする「価値と富」といったことと関連を持ちうるものである<sup>5)</sup>。そして、それらの諸稿中で扱うことのできなかった2012年のメアッチの論文にはさらに、以下のような見方も提示される。

すなわち、リカードウは、例えば『国富論』第1篇第5章第1段落中でスミスが「人が富んでいたり貧しかったり (rich or poor) するのは、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるか (can afford to enjoy) による」が、ひとたび分業が生じるとすべての人は「自分が支配できる (can command) 労働の量、または自分が購買することのできる (can afford to purchase) 労働の量に応じて、富んでいたり、貧しかったりするにちがいない」、と述べるのであるが、前者は富（使用価値；物量）に関わり後者は交換価値（価格）に関わるものであり、スミスの議論ではそれらが混同されている、とみる。だが、第7章第19段落中に示される公の喪（公喪 publick mourning; public mourning）の例では、スミスは「既に行われた仕事 (work done)」と「これから行われる仕事 (work to be done)」とを区別し、前者を「商品」と同一視している、というのである。

そして、メアッチは、そこでのスミスの議論では、公喪は、黒い布の価格を引き上げ、黒い布を持つ商人の利潤を増加させるが、織布工の賃金には影響はなく、仕立職人の賃金を高め（ここでの労働は供給不足）、色ものの絹地や毛

織物の価格を引き下げ、それらを持つ商人の利潤を減少させ、それらを調整する職人の賃金を引き下げる、等々といったことが論じられるのであるが、そこでの、「既に行われた仕事」と「これから行われる仕事」との区別は、事実上、商品（労働の生産物）と労働 (labour) との区別を意味する、とする。

メアッチによれば、スミスの場合、前者の商品（労働の生産物）は、商品・富・物量・使用価値に関わるものであり、後者の労働については、一方での「体化された労働 (labor embodied)」が、既に行われた仕事（労働の生産物）間の交換比率に関わり、他方での「労働支配力 (labor command)」が、労働の生産物（賃金財の形で既に行われた仕事）と労働自体（これから行われる仕事）との交換比率に関わるのであって、そこでは事実上、富と価値の区別は見出されるのであり、スミスの議論における価値と富についての曖昧さそのものは、論理上の混乱よりも術語上の混乱である、とされる<sup>6)</sup>。

同時に、メアッチはまた、スミスの議論におけるその曖昧さのうちの最も危険な曖昧さは、「一国の土地と労働の年々の生産物 (the annual produce of the land and labour of a country)」が時として「量 (quantity : 物量)」として、また時として「交換価値 (exchangeable value)」として、あたかもそれらの間に違いがないかのように言及されていることとみて、議論を展開する。すなわち、リカードウは、特定商品の交換価値と全体としての年々の生産物の交換価値の両価値を、体化労働原理に照らして理解するのに対し、スミスは、特定商品の交換価値を、時として、商品相互（労働の生産物相互）の関係で扱って、体化労働原理に照らして理解し、時として、商品と労働との関係で扱って、労働支配力原理に照らして理解する。またスミスは、第2篇で年々の生産物の交換価値を扱う際、個人の視点の場合には、年々の生産物の所有者が

支配するであろう「これから行われる仕事」という形で、社会の視点の場合には、「これから行われる仕事」の所有者たちが全体として支配しうる年々の生産物という形で、もっぱら、労働支配力原理に照らして理解する。しかし、個々の所有者の視点からの特定諸商品の交換価値と「ひっくるめて見た場合の (taken complexly)」諸商品の交換価値 (社会の視点からの諸商品の交換価値) とは区別されるべきである。資本の使用と資本蓄積の結果として生じる「年々の生産物」の増加 (第2篇の典型的論題) は、生産物の量の増加 (量の増加→使用価値の増加) と生産物の交換価値の増加 (このより大きな生産物量は、年々に行きわたっている賃金率で、より多くの労働・より多くの「これから行われる仕事」を支配) との両方を意味しうるのである<sup>7)</sup>。

メアッチの上述の理解との関連でいえば、筆者のみるところでは、スミスの場合、基本的に、富は生活の必需品・便益品・娯楽品であり、それは (生産的) 労働の生産物であり、その意味で富の原因は生産に投入される労働である。そして、生産物の相互交換が行われる時、生産物の交換価値という観念が発生する。そこでは、相互交換用生産物の生産に労働が投入されることによって、交換価値という事象が生起し、その意味で、相互交換される生産物 (商品) の生産に投入された労働が、生産物 (商品) の交換価値の原因ということになる。そして、分業・交換社会としての商業的社会においては、富の大きさ (必需品・便益品・娯楽品の多さ) および交換価値の大きさ (他の財貨に対する購買力の多さ) は、他人の労働に対する支配力によって測定される。そこでは、富の大きさ、その富が持つ価値 (交換価値) の大きさの尺度となるもの、また、その富を構成する個々の商品が持つ価値 (交換価値) の大きさの尺度となるものは、その社会の分業・交換体系の中に組み込ま

れている労働に対する支配力ということになる<sup>8)</sup>。また、スミスの場合、その尺度は、一つには、種々の商品の交換価値をある共通の尺度で把握することによって、相互に比較可能なものにして、商品の交換価値を規制する原理の究明に貢献する役割が付されているわけであるが、その「交換価値」そのものは、単なる交換比率ではなく、測定可能な数量、加算可能な数量であり、今日における「価格」と同様、その「交換価値」の大きさは価値尺度で表現される数量であり、例えば、今日、一国内の全生産物の価格を集計して国内総生産を表示するように、事実上一国内全生産物の交換価値を集計して国内総生産を表示することが可能なのである<sup>9)</sup>。そしてスミスは、そのような側面を持つ支配労働尺度を、『国富論』第1篇第5章第1段落で導入するのであるが、彼は、その第1段落から第6段落では、事実上、同一の時と場所における価値の測定に関わる議論を展開しているのであり<sup>10)</sup>、その限りにおいては、測定対象としての生産物の物量とその生産物が支配しうる労働量との間の比例性といったことは問題にならず、その意味で、富と価値といったことは問題にならない、ということになる。それが問題となりうるのは、異時点間比較においてである。

支配労働を「いついかなるところでも (at all times and at all places)」機能する尺度 (WN I.v.17/大河内訳 I, 63頁) と考えようとするスミスは、事実上、第7段落から第22段落で異時点間比較を可能にする価値尺度を論じようとする。

そして、そこでのスミスの議論によれば、事物の「真実価格」 (真実交換価値) は、事実上、A 当該事物が支配しうる他事物の物量、B 支配しうる労働量で示した当該事物の価格 (A は世間一般に流布している意味での真実価格、B はスミスのいう意味での真実価格で、それらの真実価格と貨幣での価格としての名目価格を区別



することは有用：AとBとの関係は「富と価値」の関係に近いもの、B-1当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる他事物の物量、B-2当該事物が支配しうる労働量で示した、当該事物の支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量、という内容を持つことになるのであった。またそこでは、1単位の労働に伴う安楽・自由・幸福の犠牲の量は経時的に不変であるが、1単位の労働が支配しうる事物の物量（実質賃金率）は経時的に可変的、と考えられているのであった。したがってそこでは、当該事物が支配しうる他事物の物量は、例えば物価指数以外に、どのような方法で経時的な比較が可能になるのか。また、当該事物が支配しうる労働量の増加（減少）は、安定的に、支配しうる労働に伴う安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加（減少）を指し示すとしても、実質賃金率可変的のため、安定的に、当該事物が支配しうる他事物の物量の増加（減少）を指し示すことはできない。

スミスの議論に尺度としての穀物が導入されるのは、この脈絡においてである。スミスは、「真実価格」と「名目価格」との区別の有用性を地代の価値を例に論じる。その際スミスは、事実上、長期における穀物の実質価格の安定性（穀物の他財貨購買力の安定性）を前提するとともに、長期における穀物の労働購買力の安定性（穀物賃金率の安定性）という考えを示しつつ議論を展開するのである。

穀物の実質価格は安定的であるから、穀物の貨幣価格（名目価格）の上昇（低下）は、貨幣価値の低下（上昇）を意味する。（事物の貨幣価格）／（穀物価格）によって、その事物の支配穀物量を算出でき、そして、穀物の実質価格が安定的であるから、その支配穀物量の増加（減少）という形で、当該事物の他財貨購買力の増加（減少）・真実価格（真実交換価値）の上昇（低下）を反映できる。また、（事物の支配穀物

量）／（穀物賃金率）によって、当該事物の支配労働量を算出できる。そして、穀物賃金率は安定的であるから、その支配労働量は、安定的に、支配労働量に換算された支配穀物量を反映でき、さらに、穀物の実質価格は安定的であるから、支配労働量に換算された他財貨に対する購買力を反映できる。同時に、その支配労働量によって、安定的に、当該事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量を把握でき、当該事物の支配労働量に増加（減少）があった場合、それは、安定的に、支配労働量に換算された他財貨に対する購買力、および、当該事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加（減少）を指し示し、その事物の真実交換価値の上昇（低下）を指し示すことになる。スミスは穀物尺度を、支配労働尺度に次ぐ次善の尺度、近似的尺度と位置付ける。だが、実際には、それは、異時点間比較のための価値尺度についてのスミスの議論の論理整合性にとって不可欠の要素を構成しているのである<sup>11)</sup>。

そのような議論を可能にしているものが、上のように、長期における穀物の実質価格の安定性（穀物の他財貨購買力の安定性）という事実上の前提と長期における穀物の労働購買力の安定性（穀物賃金率の安定性）という考えである。

以下において、長期における穀物の労働購買力の安定性に関する議論を確認し、次いで、上述の議論で事実上前提されている長期における穀物の他財貨購買力の安定性をスミスはどのように根拠づけているかをみることにする。

#### 4. 長期における穀物の労働購買力の安定性

スミスは、第5章で長期において価値の安定的な穀物と短期において価値の安定的な貨幣といったことに言及するのであるが（なお、ここでいう長期と短期は、現代経済学における、すべての生産費用が可変費用からなるものとして

の長期、生産費用が固定費用と可変費用からなるものとしての短期といったものではなく、時間としての長期と短期であり、例えば世紀から世紀にかけての期間といった遠く隔たった時点間としての長期、また、年々、長くとも半世紀あるいは1世紀といった相対的に短い時点間としての短期である。例えば WN, I.v.16／大河内訳 I, 62頁を見よ), そこでは、穀物は、労働者の生活資料 (the subsistence of the labourer) として把握されている (WN I.v.15／大河内訳 I, 61頁)。穀物が労働者の生活資料であることによって、穀物支配力が労働支配力を意味すると考えられているのである。

なお、スミスは、労働者の生活資料そのものは富裕に向かって進歩している社会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも豊かであり、停滞している社会におけるほうが、衰退している社会におけるよりも豊かである、とする。スミスは事実上、様々な商品に対する購買力としての実質賃金率は可变的であることを認めるのであるが、穀物は労働者の生活資料であり、そして、労働者の生活資料は、富裕に向かって進歩している社会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも豊かであり、停滞している社会におけるほうが、衰退している社会におけるよりも豊かであるといったように、等量の穀物ですら、正確に常に等量の労働を購入・支配するというわけではないとしても、長期では、様々な商品のうちにあって労働者の生活資料としての穀物の労働購買力 (穀物賃金率) は、趨勢として安定的、と考えているといえる<sup>12)</sup>。

## 5. 穀物の実質価格の長期的安定性を巡る諸見解

第5章には、長期における穀物の労働購買力の安定性 (労働支配力の安定性という形での穀物価値の安定性) について前述のような議論が

見出されるのであるが、長期における穀物の財貨購買力 (穀物の実質価格) の安定性 (物量としての財貨購買力の安定性という形での穀物価値の安定性) の根拠を論じる議論はない。そして、この問題との関連でよく引合い出されるのが、第11章に付された「過去4世紀間における銀の価値の変動に関する余論」, 「第1期」中の、次のような第28段落である。

「社会のあらゆる状態、改良のあらゆる段階を通じて、穀物は人間の勤労の産物である。ところで、すべての種類の勤労の平均生産量は、常にその平均消費量に大なり小なり正確に (more or less exactly: より多く正確に、あるいは、より少なく正確に) 適合するものであり、その平均供給は平均需要に適合するものである。そのうえ改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働、同じことであるが、ほぼ等量の労働の価格 (price) を必要とするであろう。というのは、耕作が進展しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである。それゆえ、我々は、以上すべての理由から、いかなる社会状態、いかなる改良の段階にあっても、等量の穀物は他のいかなる等量の土地の原生産物よりも、一層よく等量の労働を代表し、また等量の労働に対応することになるであろうということ を安んじて確信してよいだろう。したがって既に述べたように、穀物は、富と改良のすべての段階において、他のどんな商品、どんな商品群よりも正確な価値の尺度なのである。それだからこそ、我々はあらゆる段階における銀の真実価値は、それを穀物と比較することによってのほうが、他のどんな商品または商品群と比較することによってよりも、よく判断することができるのである」 (WN I.xi.e.28／大河内訳 I, 309頁)。

価値尺度に関するスミスの議論における金銀・貨幣および穀物ということに関しては、様々な論者によって様々な見解が提示されてきたのであるが<sup>13)</sup>、穀物価値の長期における安定性との関連で、以下の幾つかの見解をみておくこととする。

### 5.1 新村，羽鳥

例えば新村は、上の引用文との関連で、スミスは穀物の生産に必要な直接労働量の減少が、労働手段である家畜の生産に必要な間接労働量の増大によって相殺されるので、結局、穀物の生産に必要な総労働量はほとんど変わらないと考えている、とみる。そして、スミスは、穀物が支配する生きた労働の量はほぼ一定であることと、穀物の生産に必要な総労働量がほぼ一定であることとの全く異なる二つの理由によって、穀物の実質価値はほとんど変動せず、近似的に不変の価値尺度となりうると判断した、とする<sup>14)</sup>。

羽鳥は、上の新村の解釈を肯定的に捉え、スミスは第5章では、等量の穀物は常に市場でほぼ同一量の労働を支配するから、穀物が近似的価値尺度として選ばれるべきだと説いたのに、「余論」中では、等量の穀物の生産には常にほぼ同一量の労働が投下されるから、穀物が近似的価値尺度として選ばれるべきだと述べていたということになり、スミスは第5章では、支配労働＝価値尺度説に基づいて、穀物価値の近似的不変を論証しているのに、「余論」ではこれを投下労働＝価値規定説に拠って論証していたということになる、とする。そして羽鳥は、スミスが第6章で、資本制社会における商品価値の分析において、当該商品の生産に投下される労働量がもはやその支配労働量を規定する「唯一の事情」にはなりえないと言明することによって、支配労働＝価値尺度説を頑強に維持しつつ、投下労働＝価値規定説の適用範囲から資

本制社会の場を除外することになったのであるが、この点を考えると、スミスが「余論」中で投下労働＝価値規定説に基づいて穀物価値の近似的不変を論証していたことは、スミス自身の論理の展開からいっても不合理なことといわなければならない、とする<sup>15)</sup>。

### 5.2 シロス-ラビーニ，オドーネル

シロス-ラビーニは、事実上、穀物の生産に必要な直接労働量と労働手段である家畜の生産に必要な間接労働量を穀物生産における生産費と捉え、スミスの議論における後者の間接労働増加による前者の直接労働減少の相殺を、「費用不変」の仮定と捉える。そしてシロス-ラビーニは、スミスの場合、全商品について商品価格のうち賃金分け前の占める割合が経時的に安定的といった枠組みの中で議論が展開され、商品の「支配労働」量の経時的变化は、当該商品の「体化労働」量の経時的变化を安定的に反映することとなっていた、とする。そしてそこでは、上の「費用不変」の仮定から、穀物の労働支配力は経時的に安定的となり、また、任意の一商品の穀物支配力における経時的变化は、当該商品の労働支配力の経時的变化→当該商品の「体化労働」量の経時的变化を、安定的に反映することになる、とみる。穀物の価格（それを用いての「支配穀物」標準）は、労働の価格（それを用いての「支配労働」標準）の代用物（substitute）でありうる、というわけである<sup>16)</sup>。

他方、オドーネルは、資本主義経済に関するスミスの価格体系を一つの生産価格体系とみて、事実上、商品価格＝ $(1 + \text{利潤率}) \times (\text{商品1単位当たり生産費})$ といった形で商品価格を捉え、また、スミスが彼の尺度を使用して資本主義経済での価格変化についての研究に向かう際の基本的特徴は、一般に賃金率と利潤率とが所与とされているということであった、とする。さらにオドーネルは、スミスが実際には、特定商品

の生産に要する労働投入量と他の投入物投入量との比例的減少（あるいは増加）を念頭に置いているように思えるところで、彼はしばしば、その商品の生産に要する労働の量の減少（あるいは増加）という形で言及した、ともみる。

そしてオドーネルによれば、スミスは、資本主義的交換についての議論においては、そこでの価値尺度としての「生きた労働に対する支配力」という意味での「支配される労働」と、「体化された労働」との結び付きという形で、「支配される労働」と「体化された労働」との結び付き・労働支配力と生産の困難性との結び付きを、確定しようとするのであるが、その際スミスは、「労働者の視点」から「労働を雇う人々の視点」への意識的な転換をなすとともに、一群の仮定を設定しつつ、労苦と骨折りあるいは生産の困難性の一尺度としての労働時間、そのような労働時間の量によって表現されるものとしての価値と、生活資料の量によって表現されるものとしての価値とを、ほぼ同意義のものにすることによって、「支配される労働」と「体化された労働」との、労働支配力と生産の困難性との、結び付きを確定しようとした、とみられる。そしてそこで鍵となっている仮定が、穀物賃金率不変という仮定、および、穀物生産費（穀物1単位当たり生産費）おおよそ不変という仮定である、とされる。

オドーネルは、スミスは第5章中で、穀物賃金率不変という仮定から、長期においては、等量の穀物によってその所有者は、他の人々の労働の同一量により近いものを支配しうるのであるということを推論し、穀物生産費おおよそ不変という仮定については遠回しの言及しかしていないが、第11章の「余論」中の前出の文言で、その仮定を明示的なものにしてしている、とする。また、その文言は、穀物是不変の労働量（直接労働と間接労働という意味での不変の労働量）によって生産される（その意味で、穀物生産費

不変）ということ仮定していたわけではないということを示しているものであり、スミスの労働支配力尺度は、穀物生産におけるおおよそ不変の貨幣費用ということに基づいているのであって、穀物に体化される労働量の不変性に基づいているのではない、ともする。

オドーネルのみるところによれば、事実上、スミスの議論では、穀物賃金率不変が仮定され、その仮定は、事物の支配労働量と事物の支配穀物量とを一对一の関係で把握することを可能にするとともに、その仮定はまた、1単位の労働が意味する労苦と骨折りを反映しうるもの（この意味で、生産の困難性と関わるもの）である。また、スミスの議論では、穀物1単位当たり生産費おおよそ不変が仮定されており、利潤率（および賃金率）所与のもとでの、穀物1単位当たり生産費おおよそ不変から、穀物価格はおおよそ不変ということになり（例えば、穀物の貨幣価格の上昇・低下は、もっぱら、貨幣価値の低下・上昇によるものということになる）、そこでは、 $(\text{事物の貨幣価格}) / (\text{穀物の貨幣価格})$  から、ほぼ安定的に、事物の貨幣価格に比例する当該事物の支配穀物量が得られる。そして、 $(\text{当該事物の支配穀物量}) / (\text{穀物賃金率})$  から、当該事物の支配労働量が得られることとなるが、穀物賃金率不変のため、当該事物の支配穀物量の増減は当該事物の支配労働量の増減と比例することになる。また、スミスの議論では、穀物の場合とは異なり、特定商品の生産に要する労働投入量と他の投入物投入量との比例的増減を念頭に置くところで、しばしば、当該商品の生産に要する労働の量の増減という形で言及される。スミスの議論についてこのような見方を取りつつ、オドーネルはさらに、幾つかの追加的仮定を考慮しつつ、スミスの議論における、事物の支配労働量と事物の労働投入量との比例的増減の可能性を検討しようとするのである<sup>17)</sup>。



### 5.3 ブルーワー、ヒューケル

ブルーワーは、スミスの利潤理論を論じる過程でスミスの理論の難点をあげ、その最初のものとして、支配労働の代替的ニュメレールとしての穀物という形でスミスの議論における穀物に言及し、次のような見方を提示する。

すなわち、スミスはまず、価値尺度として支配労働を選び、賃金をニュメレールとするのであるが、史的データの不足ということから、穀物での賃金率は、他のいかなるものでの賃金率よりも一定に近いとして、穀物の使用を選択した。筋違いの複雑化を避けるために、スミスに従って、穀物での賃金率一定として取り扱うことはありうる。だがスミスは、穀物は一定量の労働と交換されると主張するだけでなく、穀物は、その生産に労働量で表示して一定量を費やさせるとも主張するのであり、それが前出の第28段落である。その文言は困惑を誘うものである。第一に、スミスはそんなことを述べる必要はなかった。問題となるのは、穀物中に体化された労働ではなくて穀物が交換される労働（穀物の労働支配力）であるからである。第二に、それは、「土壌と気候が同じであれば」に言及しており、外延的限界地でのいかなる変化をも除外しているのである。さらに、それは、家畜の価格で補正された労働生産性にのみ言及し、改良に関する収穫（return to improvement）——これは、利潤の動きの決定において鍵となる変数——への言及はない、というわけである。そしてブルーワーは、第28段落でのスミスの言説そのものは、穀物を価値の尺度として使用するという手法——スミス自身もどちらかというとき疑わしいものであることを知っていた手法——を正当化するための必死の試みと読むのが多分最善の読み方、とする<sup>18)</sup>。

また、ヒューケルは、前出の第28段落の文言を、スミスが穀物をリカードウのいう不変の価値尺度、それ自体の価値が不変な尺度と考えよ

うとしているものと捉える<sup>19)</sup>。そしてヒューケルは、上のブルーワーの所見を援用しつつ、耕境拡大のもとでの外延的限界地での生産条件変化の可能性ということを考慮すれば、不変の価値標準として穀物を選ぶことは困難になるのであって、穀物の不変の単位当たり費用といったスミスの特殊な主張は、価値の尺度としての穀物の使用を正当化しようとするための必死の試み、とみる<sup>20)</sup>。

## 6. 穀物の実質市場価格の長期における安定性

以上の諸見解に対し、筆者のみるところでは、事実上、スミスの議論における穀物の労働購買力の安定性は、スミスのいう意味での穀物の「真実価格」の安定性であり、穀物の他財貨購買力（実質価格）の安定性は、世間一般に流布している意味での穀物の「真実価格」の安定性である。そこでは、支配穀物量の増加は、一方で、支配穀物量に換算された他財貨物量支配力の増加を意味し（世間一般）、他方で、支配穀物量に換算された支配労働量の増加を意味する（スミス）。また、後者は、支配労働量に換算された、他財貨に対する購買力（労働量表示での財貨物量支配力）の増加、および、支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加を意味しうる。

そして、長期における穀物の労働購買力の安定性についてのスミスの考えは、本稿4でみたものであり、それはそれで、スミスの時代における理論構築上の一つの抽象としては、それなりの説得力を持ちうるもの、といえるのであるが、ここでは、穀物の労働購買力の安定性よりも、穀物の他財貨購買力の安定性（穀物の実質価格の安定性）が問題となる。スミスは事実上、穀物の他財貨購買力（穀物の実質市場価格）は長期的には安定的と考える。穀物の名目市場価格（穀物の貨幣市場価格）は、貨幣価値に変化

がない限り安定的であって、その意味で、穀物の実質市場価格は安定的（穀物の貨幣市場価格の上昇・低下は、貨幣価値の低下・上昇による）、と考えるのである。

それでは、その穀物の実質市場価格の長期的安定性に関するスミスの説明はどのようなものと捉えるべきか。

本稿5でみた「余論」,「第1期」の第28段落中の「そのうえ (besides) 改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働、同じことであるが、ほぼ等量の労働の価格 (price) を必要とするであろう。というのは、耕作が進展しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるからである」の部分は、たしかに、長期における穀物価値の安定性を、投入労働量の安定性、あるいは、生産費の安定性から説明しているかのようにみえる。だが筆者は、その文言に先立つ「社会のあらゆる状態、改良のあらゆる段階を通じて、穀物は人間の勤労の産物である。ところで、すべての種類の勤労の平均生産量は、常にその平均消費量に大なり小なり正確に適合するものであり、その平均供給は平均需要に適合するものである」の部分に着目する。

スミスは『国富論』で様々な商品の価値の変化、動向等に言及する。とりわけ、長い「余論」を含め第11章では、「改良の前進」のもとでの、様々な種類の土地生産物、さらに製造品の価値の長期的趨勢を議論する。

そしてそこでのスミスの議論では、「改良の前進」は、一方で、例えば長期的な人口の増加・雇用増加・所得増加等を通じて諸商品に対する市場での需要を増加させる（そこでの財は、普通財（上級財））。そしてその需要増加に牽引されて、その増加する需要に適合する形で生産・供給が組織される。その際、生産には、「改

良の前進」により、商品によっては、例えば労働生産性の向上・技術進歩・商品1単位当たり必要な労働投入量の減少等の生産条件の変化を通じて1単位当たり生産費・平均生産費が低下するものも存在することになる。また、生産者（資本家）は、生産する商品の真実交換価値（真実価格）が通常的な率での賃金——その通常的な率の大きさそのものは、長い期間については可変的——を含む生産費と、通常的な率での利潤——その通常的な率の大きさそのものは、長い期間については可変的——との合計によって決まる当該商品の最低価格よりも低くない限り生産を続ける。そしてその最低価格と比較される各商品の真実交換価値（真実価格）そのものは、長期的には、他の事情に変化がない限り、基本的には供給が需要の増加の割合に及ばない場合には上昇し、供給が需要よりも大きい割合で増加する場合には低下し、供給が需要と同程度の率で増加する場合には変化なしとなる。そこでは、例えば労働投入量の変化や生産費の変化は、直接的に価格変化を説明するものというよりも、当該商品の需給関係に変化を及ぼしうる諸要因のうちにあって、当該価格変化の説明に適していると判断される場合に言及されるものであって、当該価格変化そのものは、需給関係の変化によるものなのである<sup>21)</sup>。

スミスの場合、「社会のあらゆる状態、改良のあらゆる段階を通じて、穀物は人間の勤労の産物である。ところで、すべての種類の勤労の平均生産量は、常にその平均消費量に大なり小なり正確に（より多く正確に、あるいは、より少なく正確に）適合するものであり、その平均供給は平均需要に適合するものである」。スミスは、穀物は労働の行使によって増産可能であり、そして需要が増加した場合、事実上その増加に（より多く正確に）符合する供給増加がなされるのであり、さらに、その穀物の生産・供給増は、安定的な生産条件のもとでなされうる

のであって、これらの事情が、需給によって決まる穀物価格の長期的安定性をもたらしている、と考えるのである。

スミスの場合、生産物の価格が通常的な率での賃金を含む生産費と通常的な率での利潤との合計によって決まる当該生産物の最低価格よりも低くない限り、生産は続けられるのであるが、当該生産物の価格（市場価格）そのものは、市場での需要と供給によって決定される（土地生産物の価格＞上の最低価格の時、地代発生之余地あり）。そこでは、例えば長期的な人口増加・雇用増加・所得増加等は需要を増加させ、また、その増加する需要に適合するよう組織される供給（生産）の増加は、生産物によっては、例えば労働生産性の向上・技術進歩・商品1単位当たり必要な労働投入量の減少等の生産条件の変化を通じて1単位当たり生産費・平均生産費低下のもとでなされる。それらの要因は、例えば、需要関数、供給関数とそこでの独立変数といった関係にあるものとも考えることができる。「そのうえ（besides）改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働、同じことであるが、ほぼ等量の労働の価格（price）を必要とするであろう。というのは、耕作が進展しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるから」という事情は、穀物価格の長期的安定傾向に貢献するのであり、そこでは、投下労働価値説の視点そのものからの穀物価格の長期的安定性、あるいは、生産費説（あるいは合算説）の視点そのものからの穀物価格の長期的安定性が考えられているわけではない。

なお、リカードウの場合、事実上、直接労働に加え、直接労働を助ける例えば器具・道具・建物等（資本財）に投入されている労働としての間接労働を考え、その直接労働と間接労働か

らなるものとしての生産に必要な労働の量によって、資本の存在と両立する形で、価値の決定を説明しようとする。そして、同一の土地生産物、例えば穀物の、市場で売買される際の価格そのものは、自由競争のもとでは、最劣等地での生産に必要な労働の量に対応するものとなり、その最劣等地での生産に投入される労働量と優等地での生産に投入される労働量との差に対応する部分が、優等地の地代となり最劣等地には地代なし——経済が発展して土地使用が拡大し耕境が拡大するにつれて地代は増大——ということになる。スミスも、例えば第11章第1節で、事実上、豊度に劣った土地また立地に劣った土地での、土地生産物を生産し市場にもたらすために要する労働量の多さといった事情に触れつつ、地代は土地の豊度と位置という二つの要因によって差異が生じるとしている（WN L.xi.b.4／大河内訳Ⅰ、246－47頁）。しかし、第11章のスミスの議論によれば、ある土地の生産物から地代が生じるのは、その生産物の通常価格が、無地代土地で生産した場合に要する通常的な率での賃金費用を含む生産費を償ったうえで通常的な率での利潤を実現できる価格よりも高い時であり、そして、諸土地間の地代の大きさの差異は、土地の豊度と位置の差異から生じる、ということになるのである<sup>22)</sup>。

スミスは、「土壌と気候が同じであれば」に言及しているのであるが、豊度の劣る土地、位置の劣る土地での、穀物生産、市場への出荷に要する労働量の多さ（生産費の多さ）、それによる土地の豊度と位置の差異による地代の大きさの差異、という認識を持っている。しかし、穀物の市場価格そのものは、市場での需要と供給によって決定され、それは長期的には安定的、と考えるのである。

## 7. 結 論

『国富論』第1篇第5章の第1段落から第6

段落は同一の時と場所に関わり、第7段落から第22段落は離れた時と場所に関わる。そして、支配される生きた労働は、そのいずれでも真の価値尺度となっているのであるが、そこでは事実上、尺度は、思索の問題でのものと実際の売買、取引の問題でのもの、理論上の尺度と実際の売買、取引での尺度とが考えられている。

スミスの議論では事実上、支配労働は、時と場所のいかに問わず、理論上（思索上）の尺度である。それに対し、貨幣（銀）は、同一の時と場所に関しては、労働よりも簡明な尺度として実際の売買、取引での尺度であり、同時に、理論上の尺度でもありうる、ということになる。

同一の時と場所では、一定額の貨幣は一定量の労働支配力を意味し、商品の真実価格と名目価格は比例し、貨幣は、実際の尺度であるとともに理論上の尺度でもありうる。また、異時点間についても、相対的に短い期間では、貨幣は、実際の尺度であるとともに、労働支配力の相対的安定性の故に理論上の尺度でもありうる。

他方、長い期間については、貨幣の労働支配力は安定的でありえず、貨幣は理論上の尺度たりえない。それでも、異場所間での価格に関わる商人たちの日常的業務を規制するのは財貨の名目価格であって、異場所間については、貨幣は実際の尺度であり続けるのである。

貨幣に関して事実上うえのような見方をとる価値尺度に関するスミスの議論において、尺度としての穀物が現れるのは、長い異時点間の理論上の尺度の脈絡においてである。

では、あらゆる時と場所における真の価値尺度を支配労働とするスミスの議論において、何故に、価値尺度としての穀物が導入されなければならなかったのか。その原因は、スミスが同一の時と場所における真の価値尺度としての支配労働を、相対的に長い異時点間の価値比較にも適用しようとしたことにある、と考えられる。

スミスは、労働に伴う安楽・自由・幸福の犠

牲の経時的不変性ということから労働の価値は経時的不変とするとともに、実質賃金率の経時的可変性を認める。

スミスの場合、事物の交換価値は、当該事物の他財貨に対する購買力である。スミスはそのようなものとしての交換価値の大きさの尺度を、当該事物の労働支配力とする。同一の時と場所については、そこには論理上の問題はない。しかし、実質賃金率の経時的可変性を認めたいうえでその尺度を異時点間の価値の測定・比較にも適用しようとする時には、事情は異なる。

事物の交換価値を労働支配力で測るとすれば、支配労働量は、（当該事物の貨幣価格）／（貨幣賃金率）によって算出される。いま、実質賃金率が異時点間で上昇したとすれば、例えば商品1単位については、当該商品の物量は1単位のまま、支配労働量は減少し、当該商品1単位の交換価値は低下したことになる。また、物量が2倍になっても、実質賃金率が一定でない限り、支配労働量は2倍にならない。つまり、支配労働量の動きは、測定対象の物量の動きを正確に反映できない。そこでは、支配しうる事物の物量（富）の動きと支配しうる労働量（価値）の動きは一致しない。ここでスミスは、事物が支配しうる労働量を事物の「真実価格」としつつ、事物が支配しうる他財貨の物量を世間一般で流布している意味での事物の「真実価格」とし、また、事物のその両「真実価格」概念を有用なものとする。しかも、スミスの場合、事実上、事物が支配しうる労働量としての事物の「真実価格」（真実交換価値）そのものは、支配しうる労働量で示した当該事物が支配しうる他財貨の物量と支配しうる労働量で示した当該事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量という内容を持つのである。世間一般で流布している意味での事物の「真実価格」、そして、スミスのいう意味での事物の「真実価格」さらにそこでの支配しうる労働量で示した当該事物が



支配しうる他財貨の物量と支配しうる労働量で示した当該事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量は、どのようにして矛盾なく把握、測定されうるのか。スミスは事実上、このような困難な問題に直面することになっていたのである。そしてスミスの議論では、事実上、穀物尺度の導入によってその解決の試みがなされることとなっているのである。

スミスは、穀物地代と貨幣地代の例にみられるように、長い期間における穀物の実質価格の安定性を前提としている。そこでは、支配しうる事物の物量の動きは、支配しうる穀物の量の動きに反映されうる。世間一般で流布している意味での事物の「真実価格」の動きは、支配しうる穀物の量の動きに反映されうる。

また、スミスは、穀物の労働支配力は長い期間では安定的（穀物賃金率安定的）とみる。したがって、事物の、支配労働量に換算された他財貨に対する購買力を、穀物を使用して捉えようと、 $\text{支配労働量} = (\text{事物の穀物支配力}) / (\text{穀物賃金率})$ において、穀物賃金率安定的のため、事物の労働支配力の増加は、事物の穀物支配力の増加を安定的に反映し、後者は事物が支配しうる財貨の物量増加を安定的に反映しうる。同時に、事物の労働支配力の増加はまた、事物が支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量の増加を反映しうるのである。世間一般で流布している意味での事物の「真実価格」という考えは、スミスのいう意味での事物の「真実価格」——支配労働量に換算された支配しうる他財貨の物量および支配しうる安楽・自由・幸福の犠牲の量——という考えと両立しうるのである。

このスミスの議論の論理整合性の鍵となっているのは、長い期間での穀物の労働支配力の安定性と長い期間での穀物の実質価格の安定性であるが、前者については、スミスは事実上、様々な商品に対する購買力としての実質賃金率は可変的であることを認めるのであるが、穀物

は労働者の生活資料であり、そして、労働者の生活資料は、富裕に向かって進歩している社会におけるほうが、停滞している社会におけるよりも豊かであり、停滞している社会におけるほうが、衰退している社会におけるよりも豊かであるといったように、等量の穀物ですら、正確に常に等量の労働を購入・支配するというわけではないとしても、長期では、様々な商品のうちにあつて労働者の生活資料としての穀物の労働購買力（穀物賃金率）は、趨勢として安定的、と考える。スミスの時代における普通の人々の生計費に占める穀物の比重の大きさということからして、その時代における理論構築上の一抽象としては、スミスのこの方法もそれなりの説得力を持ちうるといえる。

他方、長い期間での穀物の実質価格の安定性については、スミスは事実上、まず、穀物は人間の勤労の産物で、穀物は労働の行使によって増産可能であり、需要が増加した場合、その増加に符合する供給増加が可能という事情をあげる。さらにスミスは、「耕作が進展しつつある状態での労働生産力の不断の増大は、農業の主要な用具である家畜の価格の不断の増大によって多かれ少なかれ相殺されるから」「改良のあらゆる段階において土壌と気候が同じであれば、等量の穀物の生産には平均的にほぼ同量の労働、同じことであるが、ほぼ等量の労働の価格（price）を必要とするであろう」という形で、事実上、上の穀物の生産・供給増は、安定的な生産条件のもとでなされうるという事情をあげる。スミスは事実上、これらの事情が、穀物の市場価格の長期的安定傾向——その意味で、穀物の実質価格の長期的安定傾向——をもたらしている、と考えるのである。したがってまたそこでは、スミスは、投下労働価値説あるいはまた生産費説（あるいは合算説）によって穀物価格の長期的安定性を説明しようとしているわけではない。投入労働量の変化、また、生産費の

変化は穀物の市場価格の変化に影響を及ぼしうる。しかし、穀物の市場価格（穀物の実質市場価格）そのものは、市場での需要と供給によって決定され、それは長期的には安定的、と考えられているのである。

スミスは、「土壌と気候が同じであれば」という条件付きで、上の安定的生産条件のもとの穀物生産増に関する議論を示すのであるが、『国富論』第1篇第11章では、地代を、耕境が拡大する状況のもとの最劣等地での穀物の価値（生産に必要な、直接労働と間接労働としての労働の量によって決定）と優等地での穀物の価値との価値差額として説明しようとしているわけではない。また、スミスは、土地の豊度と位置の差異による地代の大きさの差異という認識そのものは持っているのである。そして、耕作が進展しつつある状態での労働生産力の上昇の、農業の主要な用具である家畜の価格の上昇<sup>23)</sup>による相殺、ということについても、農業革命の時代のスミスということを考えれば、それほど無理のあるものではないであろう。

穀物尺度に関するスミスの議論中には、その議論が論理整合的なものになりうるための諸要素が準備されていたのである。

## 注

- 1) 以下のような諸類型、および、諸類型中の諸論者の個々の議論については、中川（2016）、第Ⅱ部第7章を見よ。なお、中川（2016）での指示箇所から、中川（2010）、中川（1995a）および中川（1995b）での関連箇所をたどれる。以下、同様。
- 2) 例えば中川（2022）を見よ。
- 3) 例えば WN I.v.5-6, 10, 18-22／大河内訳Ⅰ、55-56, 59, 63-66頁を見よ。
- 4) 以上については、中川（2023b）、20-21頁も見よ。
- 5) 例えば中川（2023a）、8-9頁、14-15頁注29、中川（2023b）、23-25頁、31頁注11-注12を見よ。
- 6) メアッチに関する以上の点については、Meacci（2012）、pp. 666-67, 678-82, 687を見よ。
- 7) メアッチに関する以上の点については、Meacci（2012）、pp. 684-86, 686n. 21, p. 687を見よ。なお、メアッチのこの論文については、本稿注11中の

2008年のピーチの研究とともに、リカードウ研究会第44回（2022年1月9日）での垣原秀俊氏による報告中でも言及されている。

- 8) 中川（2023a）、9-10頁、中川（2023b）、23-24頁、31頁注12を見よ。
- 9) 中川（2022）、28, 30-31頁を見よ。
- 10) 中川（2022）、19頁を見よ。
- 11) 以上については、中川（2023b）を見よ。なお、例えば2008年の研究でピーチは、スミスの「支配労働尺度」は一般的購買力の異時点間比較の指標として一般に使用するには、あまりにも制約的要素を持ちすぎるものであり、またスミスもこのことに気付いていたとみるのであるが、その際ピーチは、穀物で納めることになっている地代についてのスミスの議論では、事実上、穀物の労働支配力の長い期間での相対的安定性から、穀物は支配労働尺度のおおよその代理物（proxy）ということになっている、とみる（Peach（2008）、pp. 821-26を見よ）。それに対し筆者は、スミスは長い期間における穀物の労働支配力は相対的に安定的とみるとともに、事実上、長い期間における穀物の財貨購買力の安定性・穀物の実質価格の安定性を前提しており、それによって、異時点間比較のための尺度についてのスミスの議論は、その精度ということはおくとして、それなりに論理整合的なものになりうる、とみるのである。ピーチの上の見方を含め、スミスの尺度の用途ということについては、別稿であらためて取り扱う。
- 12) 以上については、中川（2023b）、19-21, 25-27, 28頁を見よ。なお、例えばウォルシュは、スミスの議論における、穀物の労働扶養力の安定性からの穀物の労働支配力の安定性による、「支配しうる穀物量」標準と「支配しうる労働量」標準との符合、といったことに言及する際、そういった脈絡での穀物標準と労働標準とのそのような符合は、労働者がある固定的な量の（ある最低限の）食べ物で維持される限りにおいてのみ持続するであろうが、そのようなことは、労働者の生活資料に関するスミス自身の議論と相容れないものであるとするとともに、それはまた、長期における穀物の（貨幣）価格の変動と（貨幣）賃金の変動との符合というスミスの見解のための、一つの基礎的理由づけにすぎないとみる（Walsh（1903）、pp. 49-50, 49-50n., 中川（1995a）、29-30頁、33-34頁注13, 40-41頁を見よ。なお、タイクグレバーによれば、スミスの生きた時期の間にあっては、「穀物（corn）」という用語は、パン生産に使用されるすべての穀類（cereals）——小麦、ライ麦、大麦、等々——を言い表すために用いられていたものであり、また、ほとんどの普通の人々はほとんど全くパンだけを食べて生きていたと考えられていたのであり、したがってまた、「穀物の価格（price of corn）」はおおよそのところ、「生計費（cost of living）」あるいは「食糧価格（price of food）」と同義であった、とされる。Teichgraeber（1986）、p. 203n. 82, 中川（1995a）、33-34頁注13を見よ）。  
ダウンロードも、事実上、労働者が稼いだもの

すべてを生活資料に支出するといえるのか、また、「穀物」が生活資料としての唯一の商品であるといえるのか、といった問題のあることを指摘する。同時に、スミスの議論そのものにおいては、人口変動を通じて、賃金は長期的にはある水準の生活資料を獲得しうる高さに接近する傾向を持ち、そして穀物は生活資料を意味するが故に長期的には、穀物は他のいかなる商品よりも労働支配力という点で安定的であり、長期的には穀物標準は、他の商品を標準として用いた場合に比べ、労働標準により近く接近するということが考えられていた、ともみる (Davenport (1908), pp. 15-17, 17n., 中川 (1995a), 71-74頁注2を見よ)。

また、ダンナーによれば、事実上、スミスは、穀物を主要品目とする食物という点からの労働の維持費、生計費は異場所間でも異時点間でも可変的であることを認めていたのであり、そして、最低限の住や衣を含めた全体としての最低限の生活水準でなく基本食品 (穀物) を標準としたのであるが、スミスがそうしたのは、住や衣といった項目がいかに必要であるとしても、それらの項目は経済状態の良好時期・劣悪時期を通じて基本食品よりもはるかに多くの変動にさらされやすいということによるのであった、とされる (Danner (1964), pp. 196-97, 中川 (1995b), 347頁, 354-55頁注11-注12を見よ。また、この注の以上の点については、中川 (2010), 111-12頁注64, 384頁, 427-28頁注102も見よ)。

長い期間における穀物の労働支配力の相対的安定性からの穀物尺度という議論については、例えば上のような見方も提示されてきたのであるが、筆者は、上述のタイクグレバーの所見も考慮し、スミスの時代における理論構築上の一つの抽象としては、スミスの方法もそれなりの説得力を持ちうる、と考える。

- 13) 本稿注1であげた中川 (2016), 第Ⅱ部第7章を見よ。また、例えば越智 (1998), 123-30頁も見よ。
- 14) 新村 (1986), 165-66頁。
- 15) 羽鳥 (1990), 72-73頁注4。
- 16) このシロス・ラビーニの場合には、スミスは、労働の時価についての不十分な情報とそれよりも良好な穀物の時価についての情報といった実際的な理由から、労働の時価の代わりに穀物の時価を使用するのであり、また、スミスの議論では穀物は労働者の生活資料の主要部分を代表するということになっているのであるが、スミスをして「穀物標準」をそのようなものとして使用することを可能にしているものは、穀物生産における「費用不変」(穀物の単位数量当たり費用不変) という仮定であった、とみられる。本文中のことを含め以上の点の詳細については、Sylos-Labini (1976), pp. 207-10 incl. p. 209nn. 7-8を見よ。中川 (2016), 414-15頁, 453-55頁注35-注36, 439-40頁も見よ。
- 17) なお、オドーネルによれば、厳密にはスミスの議論は、価値変化についての体化労働尺度と支配

労働尺度との比例性、一財貨の体化労働価値と支配労働価値との一致した動きそのものを示す論理を提供しうるものではなかった、とされる。本文中のことを含め以上のオドーネルの所説の詳細については、O'Donnell (1990), pp. 65-70, 82, 110, 238-39nn. 10-11を見よ。中川 (2016), 492-500, 518-23頁, 544-45頁注44, 557-62頁注77も見よ。

ヒューケルは、スミスは支配労働尺度を「生産の困難性」の変化を表現する一手段として使用しようとしたとの見方には問題はないとしても、スミスの議論そのものは、支配労働と体化労働との一貫した比例関係といったところにまで行くものではなかった、とする (Hueckel (2000b), pp. 471-76を見よ)。

- 18) Brewer (1995), pp. 196-97を見よ。
- 19) リカードウは、『経済学および課税の原理』第3版 (1821) において第1章に新設された第6節「不変の価値尺度について」の第一文で、「諸商品が相対価値において変動した場合には、実質価値 (real value: 真の価値) においてどちらの商品が下落しどちらの商品が騰貴したかを確かめる手段を持つことが望ましいであろう、そしてこのことは、これらの商品を、順次に、価値の、ある不変の標準尺度 (some invariable standard measure of value), すなわち、それ自体は他の諸商品がこうむる変動を全く受けてはならない尺度と比較することによってのみ、果たされうるであろう」と述べる。ただし、続けて、「このような尺度を持つことは不可能である……」ともする (Ricardo (1951; 1817), pp. 43-44/堀訳, 49頁)。
- 20) Hueckel (2000a), pp. 333-35を見よ。
- 21) なお、本稿3中で、メアッチの議論との関連で触れたように、筆者は、スミスの議論における富の原因そして価値の原因 (交換価値の原因) を「生産に投入された労働」とみるのであるが、交換価値の決定については、次のような見方をとる。すなわち、資本蓄積と土地占有の行われる社会状態での交換価値の決定に関するスミスの議論には、資本蓄積と土地占有に先立つ初期未開の社会状態での交換価値決定の説明にみられるようないわゆる投下労働価値説の要素、また、生産費説 (あるいは構成価格説・価値加算説・価値合算説) の要素、需給説の要素が見出されるのであるが、資本蓄積と土地占有の行われる社会状態での交換価値の決定に関するスミスの基本的な考えそのものは、『国富論』第1篇第7章にみられる供給 (市場にもたらされる数量) と需要 (有効需要: 自然価格——事実上、当該社会・地域の人々が通常価格・平均価格として相場と考える価格——を支払う意思と能力のある市場に参入する人々の需要) の関係によって市場価格の決定を説明する、というものである。本文中のことを含め以上の点については、中川 (2016), 593-645, 658-64, 689-700頁, Nakagawa (2021a), pp. 12-23, Nakagawa (2021b), pp. 2-14を見よ。
- 22) 中川 (2016), 595-99, 667-69頁, Nakagawa (2021a), pp. 10-11, Nakagawa (2021b), pp. 8-9を



見よ。

- 23) 改良の前進につれての家畜価格上昇に関するスミスの説明については、例えば WN I.xi.1/大河内訳 I, 355-70頁を見よ。中川 (2016), 615-17, 639-41, 698頁も見よ。

## 参 考 文 献

- 越智良二 (1998): 『アダム・スミスの貨幣論の研究』青葉図書。
- 中川栄治 (1995a): 『「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——(上)』広島経済大学研究双書第14冊, 広島経済大学地域経済研究所。
- (1995b): 『「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——(下)』広島経済大学研究双書第15冊, 広島経済大学地域経済研究所。
- (2010): 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——(上)』晃洋書房。
- (2016): 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——(下)』晃洋書房。
- (2020): 「アダム・スミスの「商業的社会」」『広島経済大学経済研究論集』43(2), 5-21頁。
- (2022): 「『国富論』第1篇第5章の構造」『広島経済大学経済研究論集』44(3), 17-34頁。
- (2023a): 「『国富論』第1篇第5章冒頭三段落について——「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」の視点から——」『広島経済大学経済研究論集』45(3), 1-18頁。
- (2023b): 「『国富論』第1篇第5章での異時点間価値比較のための尺度」『広島経済大学経済研究論集』46(1), 15-32頁。
- 新村 聡 (1986): 「スミス価値論の成立過程」早坂忠編『古典派経済学研究 (Ⅲ)』所収, 雄松堂出版, 131-75頁。
- 羽鳥卓也 (1990): 「『国富論』研究」未来社。
- Brewer, A. (1995): 'Rent and Profit in the *Wealth of Nations*,' *Scottish Journal of Political Economy*, 42(2), pp. 183-200.
- Danner, P. L. (1964; 1976): *An Inquiry into the Social Aspects of Adam Smith's Theory of Value*, Ph. D. dissertation, Syracuse University, ©1965, Ann Arbor, Mich.: Xerox University Microfilms, 1976.
- Davenport, H. J. (1964; 1908): *Value and Distribution: A Critical Constructive Study*, Chicago: University of Chicago Press, 1908; reprinted ed., New York: Augustus M. Kelley.
- Hueckel, G. (2000a): 'On the "Insurmountable Difficulties, Obscurity, and Embarrassment" of Smith's Fifth Chapter,' *History of Political Economy*, 32(2), pp. 317-45.
- (2000b): 'The Labor "Embodied" in Smith's Labor-Commanded Measure: A "Rationally Reconstructed" Legend,' *Journal of the History of Economic Thought*, 22(4), pp. 461-85.
- Meacci, F. (2012): 'On Adam Smith's Ambiguities on Value and Wealth,' *History of Political Economy*, 44(4), pp. 663-89.
- Nakagawa, E. (中川栄治) (2021a): 'Adam Smith's Causal Explanations of the Variations in the Value of Commodities in the Progress of Improvement: Rent Theory and Value Analysis (1),' *HUE Journal of Economics and Business* (『広島経済大学経済研究論集』), 43(3), pp. 5-24.
- (2021b): 'Some Implications of Adam Smith's Causal Explanations of the Variations in the Value of Commodities: Rent Theory and Value Analysis (2),' *HUE Journal of Economics and Business* (『広島経済大学経済研究論集』), 44(1), pp. 1-16.
- O'Donnell, R. (1990): *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke and London: Macmillan.
- Peach, T. (2008): 'A Note of Dissent on the "Index Number" Interpretation of Adam Smith's "Real Measure",' *Cambridge Journal of Economics*, 32(5), pp. 821-26.
- Ricardo, D. (1951; 1817): *The Works and Correspondence of David Ricardo*, (ed.) P. Sraffa, Vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, Cambridge: Cambridge University Press. P. スラッファ編『デイヴィッド・リカードウ全集』Ⅰ: 堀 経夫訳『経済学および課税の原理』, 雄松堂書店, 1972年。
- Smith, A. (1976; 1776): *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, (eds.) R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年。
- Sylos-Labini, P. (1976): 'Competition: The Product Markets,' in T. Wilson and A. S. Skinner (eds.) *The Market and the State: Essays in Honour of Adam Smith*, Oxford: Clarendon Press, pp. 200-232.
- Teichgraber III, R. F. (1986): '*Free Trade*' and Moral Philosophy: Rethinking the Sources of Adam Smith's *Wealth of Nations*, Durham: Duke University Press.
- Walsh, C. M. (1903): *The Fundamental Problem in Monetary Science*, New York: Macmillan.